

## 地域情報（県別）

### 【群馬】女性医師の活躍は医師不足解消の一助になる-山下由起子・群馬県女医会会長に聞く

#### ◆Vol.2

県内女性医師は995人、比率は20.5%で全国平均を下回る

2024年12月13日（金）配信 m3.com地域版

群馬県の女性医師で結成する群馬県女医会は、女性医師の地位向上を目指して群馬県女医会賞を創設した。2024年7月に第1回の表彰式を行い、医学研究奨励賞に浜谷博子医師、地域貢献賞に菊地麻美医師を選出した。同会会長の山下由起子氏に同県の女性医師の状況や労働環境改善の取り組みなどについて聞いた。（2024年10月28日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

## 群馬大学医学部、女性入学者割合は34.3%

——群馬県の女性医師の状況について教えてください。

群馬県内の女性医師の数は、増加してきています。厚生労働省の調査で、2018年は925人、2020年は968人、2022年は995人となっています。全医師に対する女性医師の割合を見ると、群馬県は20.5%（2020年）。全国平均は22.8%なので、群馬の数字は全国平均をやや下回っています。

県内の女性医師の割合を年齢別に見ると、24歳から29歳までが32.5%、30歳から39歳までが28.7%、40歳から49歳までが29.7%、50歳から59歳までが15.8%です。若い世代では、約3割が女性医師ということになります。

群馬大学医学部の女性入学者の割合は、2023年が25%、2024年が34.3%となっています。一方、全国の医学部入学者を見ると、2023年の女性の割合は40.2%です。おそらく、2018年の医学部入試不正問題の後、女性の入学者が増えているのだと思います。40.2%となったことで、25年間ずっと超えられなかった「4割の壁」がようやく突破されました。そして、11の大学では、女性入学者の割合が50%を超えています。これから、ますます女性医師の割合は増えていくことでしょう。



山下由起子氏

——女性医師はどんな不利や不安にさらされやすいでしょうか。

私は、卒業した大学の消化器外科に入局しました。先輩に数名の女性医師が在籍していたこともあり、仕事面や報酬で不利は経験しませんでした。

しかし、一般的に言えば、医療業界が長く男社会で成り立ってきたからだと思いますが、決まり事や常識が男性目線で構築されていることが多々あります。そのため、それにそぐわないと不利な立場になることはあります。例えば、現在は改善されてきていると思いますが、セクハラと言われるようなことです。以前は不快に感じて、声を上げて抗議することは難しかったです。

また、研究を続けている女性医師には、出産や育児で目指していた進路を変更したり、中断したりしなければならない状況があります。研究中でも育児のため定時に帰らなければならない状況などは、不利となっているでしょう。この点、群馬大学では研究助手をつけることで、女性研究者をサポートしています。

いろいろな不利はあるでしょうが、不利をポジティブに受け取る女性医師もいます。例えば、育児で仕事場とは違う人たちと接することで、多様な考え方に触れ、コミュニケーション能力が身に付くこともあるでしょう。ママ友との交流が、その後の仕事やスタッフとの協調、患者さんへの接し方で役立っていると感じられるのです。このような受け取り方ができれば、総合的に見ると、不利を強みに変えられるかもしれませんね。

## 保育サポーターバンク、サポーターの高齢化が課題

### ——山下会長が医師になった頃と現在を比較し、女性医師を取り巻く環境に変化は感じますか。

大きく変わったと思います。まず、医療業界全体の意識が、多様な立場を受け入れるようになったと感じます。私が外科医を目指した頃は、女性医師の応募をしていない所もありました。公には応募していても、「女性の採用はない」が暗黙の了解である所もあったと聞いています。しかし、現在はそのようなことはないでしょう。実際、群馬大学医学部附属病院では人数の多少はあっても、全ての科に女性医師がいます。

また、労働環境が女性目線で改善されたことも、大きな変化だと思います。具体的には、全国的に見ると院内保育園の設置、病児保育の拡充、男性医師の育休取得推進、県内の例では群馬県医師会が実施している保育サポーターバンク、日本医師会と群馬県が実施している女性医師ドクターバンク、群馬大学が実施している医師ワークライフ支援プログラム、県医師会女性医師支援委員会が主導で作った「医師のための子育て応援ブック」の発行などです。

### ——群馬県の各施策に群馬県女医会の先生方も関わったのでしょうか。

保育サポーターバンクには群馬県女医会賞地域貢献賞の受賞者である菊地麻美先生と私が、医師ワークライフ支援プログラムにも菊地先生が、「医師のための子育て応援ブック」には私と当会副会長の望月和子先生が参画しました。

なお、保育サポーターバンクとは、有償ボランティアである保育サポーターを利用できる制度です。県内の医師は、子どもの預かりや送迎、病児保育や病後保育などを保育サポーターに頼めます。2012年に始まり、2024年8月の数字で登録医師数は264人、登録保育サポーター数は273人です。

また、この月の合算総利用時間は約1108時間です。利用者とサポーターを事前にマッチングさせるなどきめ細かくフォローしてきたので、順調に利用者が増えてきましたが、開始から10年以上が経ち、保育サポーターの高齢化が進んでいます。保育サポーターは自分の子育てが一段落した年配の方が多いのですが、近年、人材確保が難しくなってきました。今後はサポーター確保に若い世代を採用するなどの新しい試みが必要かもしれません。

医師ワークライフ支援プログラムでは、出産や育児、介護などで臨床現場を離れた医師が不安なく業務に復帰できるよう、再教育プランを提供しています。復帰の際には、短時間勤務を含めた柔軟な働き方で参加できるようになっています。常に40人以上の登録者がいると聞いています。

「医師のための子育て応援ブック」は、県内の病院から出産や育児に対する支援策（院内保育園の有無や詳細、短時間正社員制度の有無、フレックスタイム制度の有無、時間外勤務免除の有無、宿直免除の有無、復職支援の有無など）を聞き取り、まとめたものです。ロールモデルとなる女性医師たちへのインタビューも収録しています。

### ——変化も現れ始めているようですが、女性医師がさらに活躍するためには何が必要でしょうか。

無意識の偏見（アンコンシャスバイアス）を克服することでしょうか。私たちは、男女を問わず、知らないうちに社会に存在する固定的な観念の中に身を置いていると思います。例えば、家事や育児は女性がするもの、学会や組織

の長は男性がするものといった観念が、世の中にはあるでしょう。「〇〇は男の役割」「〇〇は女の役割」と刷り込まれ、思い込んでいることがあります。

まず、それに気づき、意識を変えて行動していくことが重要だと思います。簡単なことではありませんし、時間もかかるとは思いますが、少しずつ認識が変わればよいと思います。当会にも「講演会やイベントを通じて、アンコンシャスバイアスなどに対し、意識変革の啓発をしてほしい」「男女共同参画社会の実現に向けて、情報発信をしてほしい」などの意見が寄せられています。

多様な働き方を認め、多様な働き方に柔軟に対応できる職場環境になるとよいでしょう。そうなると、男性医師も家事や育児に参加しやすくなるはずですが、実際、男性医師の育休取得制度は実現しつつあります。理想は、男性も家事や育児、介護を自分のこととしてとらえ、「自分も半分は分担する」と認識し、そのような行動が自然となることです。現状では、男性が「家事を手伝う」と考えられがちですが、「家事を手伝う」と考えていたのでは、「家事は女性」というアンコンシャスバイアスにとらわれています。「手伝う」のではなく、「分担する」と自然に思えるようになってほしいですね。

また、女性幹部の育成も必要です。組織に意思決定権のある女性を増やすために、女性幹部を養成するプログラムやサポートがあれば、より効果的になるでしょう。

今後、女性医師は確実に増えていきます。組織の意思決定に女性が関わり、組織や職場に女性目線の改革がもたらされ、女性医師がライフイベントで仕事を中断することなく、力を発揮できるようになってほしいと期待しています。そうなれば、医師不足解消の一助にもなります。そして最終的には、男女が同じ目線でものを考えられるようになってほしいです。

#### ——最後に、若い女性医師へメッセージをお願いします。

自分が医師を目指した頃の気持ちを忘れずに、前へ進んでほしいと思います。長いキャリアの中では、自分が思い描いたようにいかないことや挫折しそうになることも必ずあるのではないのでしょうか。けれども、どのような形になっても、この職に就こうと思った初心を貫くことが、道を開いてくれると思います。

周りの協力もあります。大変な時は、自分で抱え込まず、周りに助けを求めて良いのです。きっと助けてもらえます。私たち群馬県女医会も、喜んで相談に応じます。自分の人生を楽しみながら、新しい挑戦を恐れず、力を発揮してってください。若い方には可能性があるのですから。期待しています。

#### ◆山下 由起子（やました・ゆきこ）氏

1979年、東京女子医科大学を卒業し、同大消化器病センター消化器外科に入局。同大成人医学センター非常勤講師を経て、1991年に群馬県前橋市で山下医院を開業し、同院院長。2019年7月、群馬県女医会の会長に就任。日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、日本内科学会専門医、日本消化器外科学会認定医。

【取材・文・撮影＝武井克真】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

